今月の読み物

「見たり、聞いたり、探ったり」No.291

通算 No.442

青　木　行　雄

昭憲皇太后崩御百十年祭に参列して
令和６年４月11日（木）斎行
（明治神宮神前にて）

令和６年４月11日は御祭神・昭憲皇太后の御命日で、本年が百十年目にあたる。明治神宮では当日午前十時から「昭憲皇太后百十年祭」がとりおこなわれた。

昭憲皇太后は明治天皇のお后である。嘉永３年（1850）５月28日、京都の一條家に御誕生になり、明治元年（1868）に入内。御婚儀が行なわれた。

世界に類のない奇跡的な発展を遂げた明治という時代。新時代の皇后として明治天皇を内より助けつつ、常に人々に慈愛の御心を注がれ、女性としてのあるべき姿を国民にお示しになられた。

国民は心からお慕い申し上げ、国母陛下（国民のお母さま）と仰ぎましたが、明治天皇崩御から二年後の大正三年（1914）４月11日お亡くなりになられた。御在世中、特に社会福祉事業に尽くされ、明治45年（1912）には平時における救護事業のためにと国際赤十字に十万円（現在の三億円以上）を寄贈された。これによって「昭憲皇太后基金」が創設。現在も４月11日の御命日にあわせて各国の赤十字への配分が発表され、開発途上の国々で保健衛生事業や災害救護事業に活用されている。

昭憲皇太后御尊影（明治21年）（1888年）

昭憲皇太后御写真（明治５年）（1872年）

令和６年３月10日、明治神宮宮司、九條道成氏より招待状が届いた。

謹啓　早春の候　愈々ご清栄の御事とお慶び申し上げます。

さて　来る四月十一日（木）は昭憲皇太后崩御百十年にあたり当日午前十時より百十年祭を斎行致しますのでお繰り合せご参列下さいますようご案内申し上げます

令和六年三月

明治神宮宮司　　九條道成

◉　当日午前九時三十分までに参集殿受付へお越し願います。

◉　当日受付は本状封筒をお示し下さい

◉　祭典終了後、明治神宮国際神道文化研究所主任研究員、今泉宜子による講演、引き続き直会を予定致しております

以上が招待状の内容であった。

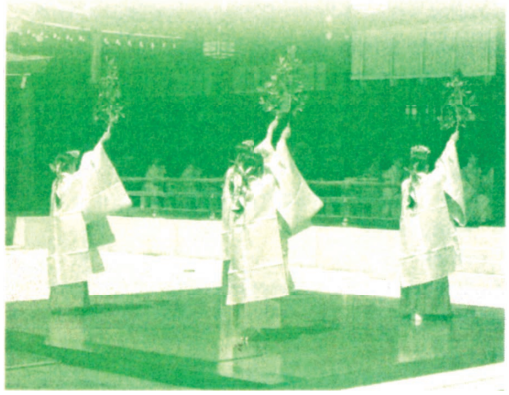
※私は奈良春日大社藤裔会（とうえいかい）の会員で理事をさせてもらっている。この会の会長が九條道成明治神宮宮司の父で長年お世話になった。父は数年前に他界したが、人脈は今でも続いている。

この祭典は四月十一日に斎行されたが、直前の四月九日（火）、天皇皇后両陛下、上皇上皇后両陛下、秋篠宮皇嗣同妃両殿下も御参拝された。

祭典で巫女（みこ）が舞った神楽舞（かぐらまい）「呉竹（くれたけ）の舞（まい）」は、昭憲皇太后が詠まれた和歌約３万首の中の御歌（みうた）に、作曲、振付けをしたといい、五色の絹を結んだ榊（さかき）を手にして舞われた。

祭典式次第

一、報鼓
一、宮司一拝
一、開扉
一、献饌
一、祝詞奏上
一、神楽「呉竹の舞」奉奏
一、「金剛石」奉唱
一、玉串拝礼
一、撤饌
一、閉扉
一、宮司一拝
一、報鼓



祭典式次第

〔呉竹（くれたけ）の舞（まい）〕

「人はただすなほならなむ　呉竹の世にたちこえむふしはなくとも」

四人の巫女（みこ）が神殿前の中庭に作られた高さ15cm程の板舞台の上で五色の絹を結んだ榊を手に「呉竹の舞」を神聖にして優雅に披露された。

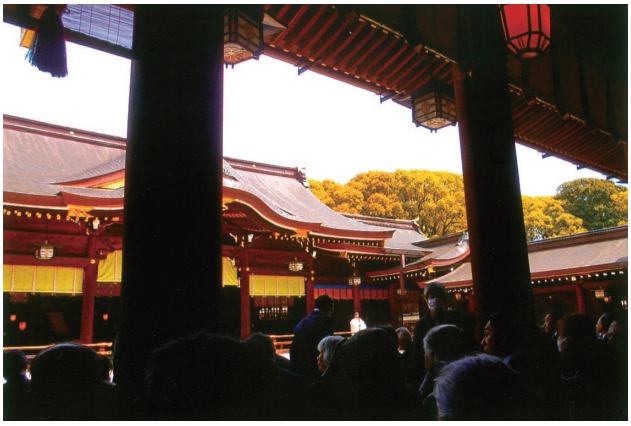
当日参加者全員に贈呈された本「明治を綴る麗しの歌」英語で伝えたい・昭憲皇太后百首。明治天皇を

会場より神殿に移動する参加者たち

本殿前の参拝者たち。外人もかなりいた

百十年祭に参加する受付と会場

会場の看板



式典内の写真。式典中はとれないが、おもわず１枚

神宮参道。所々にかかげられた、天皇、皇太后の和歌が見られる

温かく支えつつ新しい時代をともに歩まれて、昭憲皇太后の約３万首の御歌から精選された魅力あふれる百首を、好評『敷島の道に架ける橋』に続き、美しい英語との対訳形式で味わう。〈解説〉永田紅、中央公論新社。昭憲皇太后、110年祭記念。

ハロルド・ライト

明治神宮　監修

この本の中から、昭憲皇太后御尊影写真２枚おかりした。又文面も参考資料として２～３記載した。

直会の会場風景

明治天皇あるいはその御治世である明治時代は、多くの国民にとって、江戸幕府の終焉から短期間で近代化を成し遂げた輝かしさと繁栄はともに思い出される。一方、その目覚ましい国家形成の中で昭憲皇太后が果たされた御実績には、あまり触れられる機会がないように思う。千年に亘る古都京都で守られてきた皇室の伝統を尊重されつつ、明治天皇を内から温かくお支えになられながら革新へと大きく一歩を踏み出された皇后。宮中に洋装を採り入れられたこの一例にとっても大変なご覚悟を伴われたもの

と拝察する。開国によってもたらされた西洋文化・文物への女性ならではの眼差しが、いくつもの御歌に表現されているように思う。また、国内産業の振興や女子教育への思い、世界の人々との交流や平和を祈られる御心など、今なお、私たちに優しく語りかけていられるように感じた。

日本各地に行幸される天皇の旅路をご案じになるもの。明治天皇とともに激動の時代を歩まれた御心の内から溢れるように詠まれた御歌をとおして、何気ない自然を愛でて感謝する気持ちや、受け継がれてきた大和心に思いを馳せながら、御歌を心に秘めたい。

「夜ひかる玉も何せむみをてらす書(ふみ)こそ人のたからなりけり」(明治12年)
(光かがやく宝石よりも書物ことが身を照らしてくれる宝なのだ)

昭憲皇太后は左大臣一条忠香(ただか)の三女として嘉永３年(1850)にご誕生になられた。幼名は勝子(まさこ)のちに明治天皇とのご婚約に伴い美子(はるこ)と改名された。このお名前はご本人の淑(しと)やかな美しさと小柄なかわいらしさを表したものという。1869年(明治２)のご成婚のときには明治天皇も皇后もすでに長年に亘り和歌を詠まれていた。和歌は短歌とも呼ばれ、古くから日本の歌人より親しまれてきた31音節の形式からなる韻文である。天皇も皇后も共に五歳のときから和歌を詠まれていたという。天皇はご生涯に約10万首、皇后は約３万首の和歌を詠まれたといわれる。長年に亘り、お二方は詠まれてきた和歌をお互いに、あるいは皇居の外にご披露になってきた。

お若いころの皇后の御歌が上記の一例である。

昭憲皇太后の父、一条忠香(ただか)は、子どもたちの教育に大変熱心であったという。幼いころから四書五経の素読、和学や漢籍を学ばせ、「物見の台」を設けて庶民の暮らしぶりへも目を向けさせたという。和歌の師は近衛忠熙(ただひろ)であった。

「ねこの子をひざにおきつつふみよみし幼心もゆめとなりにき」(明治34年)

幼い日々、子猫を膝にのせて本を読む。猫のやわらかな毛と体温を感じながら、書物の世界に入り込み、まだ見ぬ世界への憧れをいだく。これから広がりゆく未来への心躍りを胸に、読書に没頭している少女。後年、「書を見るの楽しみより楽しみは無し」と語ったと伝えられるように、たいそうな読書好きで勉強家であった。そんな幼い日々も夢にように遠くなってしまったとの感慨が詠まれた。50歳を過ぎてからの一首である。

すばらしい情景が目にうかぶ一首である。

皇后となってから女子教育を熱心に奨励されて、学問によって世界がゆたかにひろがることを、身をもって感じておられた。

東京女子師範学校(現在のお茶の水女子大学)や華族女学校(現在の学習院女子中等科・高等科)を支援してたびたび行啓になり、それぞれの学校に御歌を下賜されている。それらの御歌には譜が付され、現在も校歌として歌い継がれている。

明治20年(1887)３月、華族女学校に「金剛石」「水は器」のふたつの御歌を下賜された。初めて発表になった時には、昭憲皇太后みずからが壇上で場内隅々にまで響きわたるような高いお声でお読みになったという。

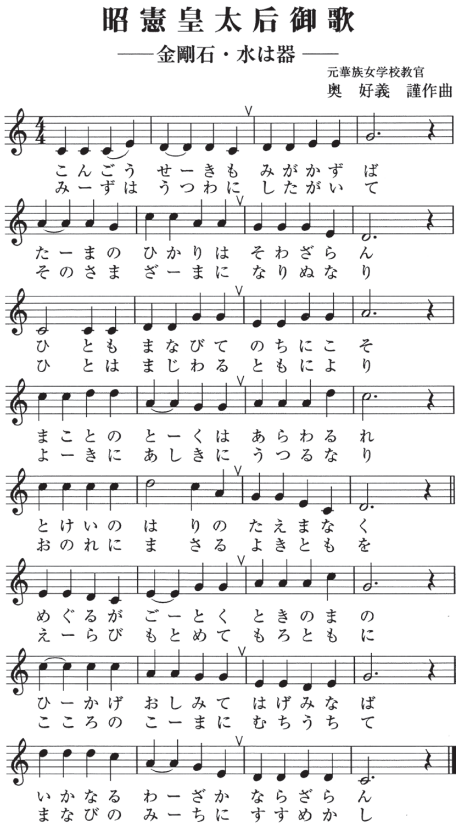
金剛石

金剛石も　みがかずば
珠のひかりは　そはざらむ
人もまなびて　のちにこそ
まことの徳は　あらはるれ
時計のはりの　たえまなく
めぐるがごとく　時のまの
日かげをしみて　はげみなば
いかなるわざか　ならざらむ

水は器

水はうつはに　したがひて
そのさまざまに　なりぬなり
人はまじはる　友により
よきにあしきに　うつるなり
おのれにまさる　よき友を
えらびもとめて　もろともに
こころの駒に　むちうちて
まなびの道に　すすめかし

明治20年３月、昭憲皇太后は華族女学校（現在の学習院女子中・高等科）に「金剛石」と「水は器」の二篇の唱歌を下賜（かし）されました。怠ることなく、また良き友を選び求めて日々の修学に励むことの大切さなどを諭（さと）されたのです。



歌意としては、非常にわかりやすい。「金剛石」は「みがかずば」と同様、つねに自分を高めるための努力を続ける必要性を説いている。また、「水の器」は水が器によって形を変えるように、人は交わる友によって良くも悪くも変わるものであるから、自分に勝るよい人間を友として持ち、自らに厳しく学びの道をお進みなさいね、とあたたかく鼓舞するものである。

いずれも、ものごとの本質が象徴的に表され、説得力がある。どのように喩えれば年若い女子学生たちの心にひびくかということを深く考えられた故の作と思う。それはまた、自身の心の内をしずかに見つめて導き出された、自戒をこめた言葉でもあった。

昭憲皇太后の御歌は何回も書いたように約３万首あり、「明治を綴る麗しの歌」歌集百首の中から、最後に紹介したい和歌、1876年（明治９）２月に東京女子師範学校に贈られた、「みがかずば」という御歌でしめくくりたい。

「みがかずば玉も鏡も何かせむまなびの道もかくこそありけれ」

宝石も鏡も、磨かなければ何にもなりません。学びの道というのも、まさにこのようなことです。自身をかがやかせるためには、研鑽を積んで自身を磨きつづけることです。

明治天皇のお后（きさき）として生涯をおくられた、昭憲皇太后のあまり触れられる機会も少なかった内面にふれ、激動の時代を歩まれた御心の内から溢れるように詠まれた御歌に心うたれました。

令和６年５月５日